



第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

吉川, 圭太

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 13(平成26年度事業報告書):37-38

(Issue Date)

2015-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009339>



財機構とが主催した「全国史料ネット研究交流集会」（2015年2月14-15日、於神戸国際会館・野村證券神戸支店アネックスホール）に人文学研究科地域連携センターが共催した。奥村弘が「史料ネットの20年と地域歴史文化」と題して講演したほか、各地資料ネット16団体が報告をし、「『地域歴史遺産』の保全・継承に向けての神戸宣言」が採択された。2日間で延べ250名が参加した。

（文責・吉川圭太）

（3）神戸市兵庫区平野地区における活動

本年度も「奥平野古文書勉強会」毎月1回（第2日曜）開催され（8月と12月は休会）、すべての例会で木村がチューターを行った。

（文責・木村修二）

新出の九鬼家文書の調査と公開

2013年6月、神戸市在住の市民の方から、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターに、ご自宅に所蔵されていた古文書について、大学で研究・教育に活用してほしいということで、寄託のお申し出をいただいた。

この古文書は、織田信長黒印状、豊臣秀吉朱印状、豊臣秀次朱印状、徳川家康書状写などで、地域連携センターで、それらについて調査をおこなった結果、原文書については、印章や文書の様式などに問題はなく、いずれも真正なものと判断したが、さらに大阪城天守閣や、京都大学名誉教授の藤井讓治氏にもご覧いただき、真正なものであることをご確認いただいた。

こうした調査を受けて、2014年12月8日に記者発表をおこない、また地域連携センター年報『LINK』6号（2014年12月刊行）に史料紹介を掲載して、史料を公開した。（文責・村井良介）

石川準吉関係資料の調査

石川準吉関係資料は、戦前企画院調査官などをつとめ、戦後は官僚であると同時に生野鉦山史研究など歴史研究にも取り組んだ石川準吉氏の資料

群である。2010年3月に準吉氏の御子息通敬氏のご協力を得て調査を開始し、2013年度までに整理と目録作成、全点表紙撮影を終え、2014年度から内容の撮影に入っている。本年度は、三村昌司（東京未来大学）の統括のもとアルバイト3名を雇用し、石川準吉関係文書内の国家総動員法関係史料を中心に撮影を行った。作業は、資料群が保管されている民間の倉庫において行われた。日時は2015年1月22日、25日、29日、2月12日、19日、26日、3月5日、12日、16日、19日、23日、26日、30日の13回であった。（文責・三村昌司）

— 第4章 —

阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

阪神・淡路大震災発生から20年を迎える本年度は、いくつかの団体に協力して次のような震災資料関係の報告や意見交換会等を行なった。

①10月26日

長岡市立中央図書館講堂で開催されたシンポジウム「災害と復興をかたりつぐ」（リレー講演会「災害史に学ぶ」第12回）に、佐々木和子が講師として参加した。

②11月28日

東日本大震災の震災資料関係機関の視察及び意見交換として、奥村弘・佐々木和子・吉川圭太・水本有香が、岩沼市史編纂室及び岩沼市役所を訪問し、岩沼市内における震災資料の収集・保存について意見交換した。また、宮城県図書館を訪問し、宮城県内で進められている東日本大震災資料の収集事業などについて意見交換を行なった。

③12月24日～2015年1月29日

附属図書館の資料展「つたえる・つながる～阪神・淡路大震災20年」の第2期（12月24日～2015年1月29日、於社会科学系図書館）の併設展示として、学生によるパネル展「記憶から歴史へ—阪

神・淡路大震災を知らない世代の取り組み—」を開催した。これは日本史演習(奥村弘担当)を受講する学部生が主体となって制作した展示であり、佐々木和子・吉川圭太・兒玉州平らが協力した。

④2015年1月9日

神戸大学六甲台講堂で開催された神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第3回シンポジウム「大震災を踏まえた教訓と課題——次世代へつなぐ」で、吉川圭太が「震災の記憶を歴史として伝えるために」と題して報告し、奥村弘がパネルディスカッションのコーディネーターを務めた。

また、同会場内において震災資料関連事業についてのポスター展示を行なった。

⑤1月23日

神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費(研究代表・奥村弘)の主催、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、科研S研究グループ、神戸大学都市安全研究センタープロジェクト(研究代表・奥村弘)、神戸大学附属図書館の共催による「第4回被災地図書館との情報交換会」(第15回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、科研S第2回地域歴史資料学研究会を兼ねる)を神戸大学附属図書館フロンティア館で開催した。

これは東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館・岩手県立図書館・東北大学附属図書館・宮城県図書館・長岡市立中央図書館文書資料室・国立国会図書館など東日本大震災資料関係機関と、神戸大学附属図書館・兵庫県立図書館など阪神間の震災資料関係機関の職員の方々とで現状や課題などについて意見交換を行なうものである。奥村弘が「大規模災害の記憶の共振とその歴史化——阪神・淡路大震災と東日本大震災の資料から考える」と題して報告を行なった。

また、午前中に同会場にて、田中洋史氏(長岡市立中央図書館文書資料室)を講師とする震災資料整理のワークショップを開催した。

⑥3月15日

仙台で開催された第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムの被災大学間連携シンポジウム

「住民主体の災害復興と大学の役割」(神戸大学・岩手大学・東北大学主催、於仙台市情報・産業プラザ)において、奥村弘が「大災害の記憶と研究を伝えていく大学の役割」と題して報告した。

⑦3月15日

福島県立博物館で開催された「ふくしま震災遺産保全プロジェクト『震災遺産を考える』」に佐々木和子が参加し、震災遺構の保存継承などについて情報交換した。また同日、佐々木がいわき明星大学震災アーカイブ室を視察し、同室長の石丸純一氏と意見交換を行った。(文責・吉川圭太)

— 第5章 —

地域歴史遺産の活用をはかる人材養成 (学生・院生教育)

地域歴史遺産の活用をはかる リーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年(2004)度から平成18年(2006)度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援を受け、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた(文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム)。この事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」(前期課程)と「地域歴史遺産活用企画演習」(後期課程)の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」(学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B)は、